ただここで面白いのはむしろ支那盛り場特有の小盗兒市場の存在である。

小盗兒と稱するものの、全部盗品と云ふのではない。家財、貴金屬、何でも御座れの古道具市場で、ストーブの蓋もあれば窓の扉、蠟燭立、靴の片足。ありとあらゆるガラクタが一ブロック街劃を埋め盡してゐる。宛然、巴里の蚤の市の大掛りで恒久性のものである。

市場の中に天幕をしつらへた、奇術師、講談師等が青龍刀をつらねたり、漢楚軍談を講じてゐる。その黒山の人だかりの集團の隅々までを饅頭燒、蕎麥屋等が、馥郁たる佳香をくゆらしてゐる。

明らかに、これこそ大連の觀光價値であり、支那人の愉快なる大陸性を表出して餘蘊無い。

沙河口は、特記の要なきまづしき日本人街である。

その一〇　滿洲國

奉天・新京・ハルビン・吉林

これ等の都市によつて全滿の盛り場を指摘することは危險かも知れない。然し、日本の盛り場の要素が大なり小なり、銀座、淺草、心齋橋にあることを知るならば、この危險にもかなり許されてよい部分がある筈である。

一、新　京

帝都新京はまだ都市景觀を完成してゐない。從つて、滿洲國の銀座は滿鐵新京と舊長春城内と二箇所にあることになる。

城内の盛り場は大馬路及び南北大街である。支那にしては珍らしく、どこかに歐風な所があり、歩車道は區別され、街路照明もある。

尤も、この街路照明はあると云ふものの頗る奇拔なもので、グローブが透明なガラスで、しかもその形が繭玉そのままである。しかもそれが又ポールヘッドだから淡白なものである。支那人の美意識にはどこか解らない所がある。ガラス繪と云ひ、支那式洋風建築と云ひ、實に歐米を學ぶことに於て獨特な技巧

を有つてゐる（と云つてもこれは必ずしも賞めた意味ではない）。

看板なんかでも、この大通には大きな手を軒から出しそれに指輪をはめたのがあると思へば、くだものかごの模型を店舗の入口に十許りも貼りつけてゐるくだもの屋がある。時計屋は時計、眼鏡屋は眼がねと軒の部分の賑かなことおびただしい。

所々に市場があり、市場の周圍には露店級の飲食店が附着してゐること、型の如しである。

日本人の盛り場は内地そのままの商店街。名前は大いに氣がきいてダイヤ街。但し一向に味も何にもない。

ただ面白いのは、このダイヤ街は滿洲各日本人盛り場同樣、決してそれが例の勇ましい驛中心放射線に出ないで、型の如く放射線を二邊とする三角形の一邊に出たことである。

格別その線の延長上に何かあると云ふことでもなく、こんな所に發生するの

が盛り場の妙味である。

二、哈　爾　濱

「北滿の上海」ハルビン。それは盛り場的にもまばゆき寶庫である。

ロシヤ人はキタヤスカヤ大街を有ち、支那人は傳家甸を有つてゐる。日本人も埠頭邊に一寸したモストワヤと云ふ商店街を有してゐるが、これは上述の二つには比すべくもなく、むしろ日本人として正陽邊に創設中の大盛り場が、これ等に對立するのであらう。

キタヤスカヤ大街

その名のいかに帝政的なる。華かにして大きく、しかもいづこかに繻の飾と馬蹄の響をひそましめるキタヤスカヤ！

然してそれは又形に於ても頗る大陸的に、大まかで何の考慮もなく、松花江に直進し、北風をまともに受ける。

ロシア人等はいかに風强くとも雪多くともこの散歩を忘れなかつたと云ふ。

高層建築沿道に立ちならび、いかにも古き極東の町の匂ひがある（松花江に近く監獄がある等氣分十二分である）。

面白いのはその歩道に沿うてのべつにベンチが置いてあることである。行人は隨時それに憩うて靜かなる陽と時とを味はつてゐる（勿論。それは露西亞人にして老人）。

町の交叉點の所々に新聞賣場があつたり廣告塔があるのも好い。ただ何となく町全體が汚れてゐるのは、ロシア人の大部が去つて滿人に置きかへられた是非なさであると云ふ。

キタヤスカヤに沿うて裏町に、ヤポンスカヤと云ふ花柳中心がある。

傳家甸は支那人街の中心で、どこにも見る支那式の商店街である。往來から一寸入る路次があると、その路次が直に一軒の露店になり、商品を所せましと陳列する。いかにも自由で親しみ深く、そして汚ない。これに沿ふ裏町に平康里があることも定石通りである（面白いのはハルビンの中この傳家甸だけが吉

林省に屬してゐることである）。

正陽區

話は前後するが、ハルビンの市街は鐵道で割れてゐる。

鐵道の東南が丘陵で山の手住宅地。これは區劃整然としてゐる。鐵道の西北の松花江との間が一間の低段地。さうしてこれがキタヤスカヤ、傳家甸の所在なのである。下町と云ふ所であらう。

正陽の盛り場も、この低段地の西南端にもくろまれつつある鐵道工場、市場公園等と云ふ後背地と併せ、その淺草が創設されるのである。

これは盛り場の都市計畫事業としては恐らく我々同僚の手によつて爲される最大のものであらう。

三、奉　天

奉天は今大連、京城に對立し、滿洲の京阪たらんとしてゐる。もとより古來の京都の地で全滿の首都であつたのであるから、滿洲的には中心であり、邦人

としても老舗都市の落ち着き安全性等混き交ぜて、消費中心と見られる。

ここに盛り場は日本人の爲には春日町があり、滿人の爲には北市場（筆者の附名）がある。これを京城に鐘路と本町ある事と思ひ合はせれば、盛り場は人種的に分たるべきかも知れない。又日本人盛り場が夜店を有する商店街にして發生箇所が鐵道線路に併行なること新京同樣。この盛り場の發生理由をその兩端を結ぶ春日彌生の兩小學校とすることは當りかねる氣がする。

春日町の南半が青葉町。これと直角に南一條なる私娼街——平康里がある。

かくしてまづ買ひ出し散歩外に何樂しみなき盛り場である。歩むこと一時間にして終り、心滿たされぬことおびただしい。

盛り場にはあくまで輕度（時間と金に於て）の娯樂が心要である。——それが屢々夜店なのであるが、夜店でも結局滿されざる場合ある事をここにしてしみじみ味はつた。

支那人盛り場の大なるものは畫は當然奉天の城内である。小西門大街、四平

滿の一區劃がそれであるが、これは高級支那品商店街と云ふだけで、夜間は人通り稀である。

匪賊の襲來にこりてゐる支那商人達は、夜間の小賣りの習慣を有つてゐない（城の西南の邊には常石通り小盗兒市場がある）。それよりも所謂、眞の支那人らしい盛り場は大放射線浪花通に北鐵道間の不思議な帶狀地にある。これこそ大歡樂境で、まづ周圍を大きく日本人料理の柳町、日鮮人料理店の集合地十間房が取圍み、その中に集結してゐる。中央が市場と私娼街。これをかこんで極めて程度の低い商店街があり、商店に交つて劇場が二三ある。

露店は隨所に市場の塀、私娼街の出入口にあり、——はげしいのは私娼の部室の入口に書畫をかかげて悠然これをひさぐ老漢さへゐる。露店の種類は概ね飲食店でウドン、マンヂウ、シウマイと云つたものが湯けむりを立ててゐる。

劇場は入場料五錢。例の晦澁極まる象徴劇であるけれども觀客は鮨詰の滿員、それが殆ど全部と云ひたい位、顔も洗はぬ苦力である。

これによつて判ずるに、支那の盛り場は勞働者に對し性と食と、娯樂を與へる必需品であるのだ（あたかもアメリカの盛り場がアメリカ人に對する如く）。これであつてこそ盛り場なのである。

吉林に於ては大して特別なものを發見しない。ただここの平康里の構造が面白い。それは中央に茶房たるべき建築あり、それをめぐつて、私娼街が方形にかこんでゐるのである。頗る都市計畫的であり、去り難きものがある。

以上滿洲各盛り場を通じて、その特徴は必ず私娼街を中心とする（平康里）こと、市場に近接すること、時に小盗兒市場も加はる）、劇場あること等、明らかにそれは震災前の淺草の構造である。

省みて面白いのは滿洲に於ける盛り場熱で、各地ともそれぞれの盛り場を計畫してゐる。ハルビンに於ては既に述べた通り。奉天には盛り場建設の會社があり、新京には國都計畫の中に盛り場が入つてゐる。

内地に於ては觀光計畫工場誘致等が都市經營の主題目となつてゐる時に、滿洲では大衆消費の爲の盛り場が重要視される所、正直なる「土の希望」を見せて親しさを禁じ得ない。明らかに山紫水明の國に於て奢侈逸樂の代表者の如くあつかはれてゐる盛り場も、黄沙の中の生活に於ては一日も缺くべからざるバン以上のものであるらしい。

追記　盛り場の研究は自分の約半生を費した題目であつた。自分はその中に都市本來の使命を見出し、出來るだけこれを育む事に努めたのであるが、たまたま現代の都市が商店街を基調としてきたことから、この時世に於て一應の强い吟味をうけることになつた。さうしてその吟味の强さは、もし無理解のままに進められるなら盛り場そのものがみな滅させられかねまじい勢にある。そこで、自分の今の努力は極力それにブレーキをかけることにある。

この風土記は自分の以上の熱意がそのまま受け入れられた時代の所産である。從つて今日と多少波長の合はぬ點（特に照明を中心として）が大分あるやうに思はれる。それをどう讀んでいただくか、讀者との間に複雜な妥協が要せられるやうに思ふ。要は、自分の言はんとする精神を酌んでい

ただくにある。

またこれには盛り場それぞれに圖面を附したのであるが、紙面の關係で大部分（殆ど全部）を省略した。從つて靴を掻く思ひをせられることと思ふ。その點申し譯ないわけである。

從つてこの章の讀み方は、以上のやうに筆者の精神を極力理解していただくこと、讀者にとつて親しい都市について讀んでいただくこと、第三には旅行のときには必ず鞄に入れていつていただき現地について照合し、興味をもつていただくことである。もしそれこの風土記に刺戟せられて都市から都市へ旅せられるに至るならば、筆者の本懷これより大なるはない。

後書

本書は序文で述べたやうに自分の長い都市計畫生活の工房拾遺である。從つてこれ等の論文の中に二十有餘年の歳月が流れてゐるので、ときに前後に於て多少論旨の矛盾が出てくるのは止むを得ない。いはばそれは發展的矛盾とでもいふべきものであらう。

ただ自分としてはその間終始なにか變らぬ考へは追つてきたやうに思ふ。その「追つたもの」は卽ち暖き人間生活、隣人生活の建設といふことである。それを私は初め中世都市に見出し、その近代的な發展としてしばらくは英國の田園都市に低徊してゐた。しかし田園都市が結局出來ない相談の遊戯（――田園都市が、ではない、英國に於て田園都市を作ることが、である）とわかつて失望してゐるところへ、極めて實踐的なナチスの國土計畫が現れ、今や全く夜は明けきつたといふ感じがしてゐるのである。この書を通讀すればその間の消息は解つていただけると思ふ。尤もそのためには、田園都市的なもの（「鄕土都市」の章以前）を先に、國土計畫的なもの（「鄕土都市」の章以後）を先に、更に詳しく

いふならば、鄕土都市・都市の味・都市人口を支配するもの・盛り場風土記・大東京の構造・百年後の都市・南方都市計畫への提言といふ順に讀んで頂だく必要があるのである。

それからまた敏感な讀者の中には、この書を通じ特に「鄕土都市」及び「都市の味」の章に歐米都市を嘆賞する形跡があるのに何等かの感慨をもたれた方があるかもしれない。それはそれらの章が自分の洋行直後に書かれたものであるせゐでもあるが、しかし正直自分は今でも都市に關する限り、彼等に參考とする點がないとはいへないと思つてゐるのである。いふまでもなく、今日何人といへども總ての點に於て無反省に外國のコッピイをやらうといふ氣持をもつてゐるものはあるまい。少くも我々は彼等の都市（特にアメリカ都市及び英國の工業都市）の惡弊を知悉してゐるつもりであるが、それにしても彼等の中にも泥中の珠玉が二三はあり、特に獨逸のラインの中小都市の如き、眼もさめる美術作品的都市があるといふことだけは否定出來ない氣がする。これは否定しない方がむしろ東洋の寛容を示すことになるとさへ考へてゐる。

ここに斷るまでもなく、いま我々に必要なのは共榮圈指導者としての「力」の具備である。從つて我々はとかくからした場合ひつかかりやすい「趣味の日本」に足枷をかけられて、本來の使命をないがしろにする暇をも自由をももつてゐない筈である。巷間にいふと

ところの日本的といふことばも、日本の舊套といふ意味ではなく、むしろ維新の人達が斷乎頭髮を剪り、袴を脫ぎ、廢刀した果敢な態度を日本的とさへ見て、平然と新しき大東亞形式に入るべきであると考へる。その心境に安定して、さて日本の都市に省みる點多く、彼等にも亦採るべきものがあれば、遲滯なくこれを採るべきではあるまいか。その際一應鹿鳴館的過誤があつても差支へないとさへ自分は考へる。むしろその若さこそ迫力であると思ふのである。

尤も森戸辰男氏でさへその久しぶりの臥龍窟獨語に於て「遂に傳統は飛躍しないものであることを悟り得た」と言つた。それに倣つて自分も、「日本の都市の中からのみ日本の都市が出來る」とは云はないが、「西洋の都市にあらざる日本の都市」もあり得ることは考へる。それこそ卽ち「大東亞日本の都市」である。この片著はその大東亞都市論の序說である。

何にしても自分はこの書を通じて心から讀者の胸に語りかけようとしてゐる。それは聚落に興味をもつてほしいといふことである。聚落こそは個人が「人間全體」となる發足點である、聚落こそは國家・民族の搖籃なのである。旅するにもハイキングするにも、汽車の窓からでも旅宿でも、「聚落」に興味をもつてほしい——と、切に語りかけたいのである。

著者略歴

一、大正七年　東京帝國大學工科大學卒業
一、大正九年　内務省都市計畫委員會技師拜命
一、大正十一年　歐米各國へ出張
一、昭和十三年　上海都市建設に從事
一、昭和十七年　再度上海建設に從事

著書　防空日本の構成（天元社）　日本國土計畫論（八元社）　都市計畫及び國土計畫（工業圖書會社）　戰爭と都市（電通出版部）等

昭和十八年三月十三日第一刷印刷
昭和十八年三月二十日第一刷發行　（二〇〇〇部）

都市の生態

㊞【定價金二圓五十錢】

著作者　東京市豐島區椎名町一ノ一八八三　石川榮耀
發行者　東京市日本橋區吳服橋二ノ五　神田龍一
印刷者　東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二　若林吉郎兵衛
印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二　（東一）大日本印刷株式會社
製本所　東京市麴町區飯田町一ノ一六　河手製本所
配給元　東京市神田區淡路町二ノ九　日本出版配給株式會社
發行所　東京市日本橋區吳服橋二ノ五　春秋社松柏館　振替東京二四八六一番　電話日本橋二六二四番

出文協承認　ア 280182　會員番號 112562

乱丁・落丁等の不完全品は早速お取替致します

春秋社教養叢書

*寺尾　新著　**魚・海・人**
海と魚との科學隨筆集　三三六頁　價一・八〇

*岩崎磯五郎著　**汽車と鐵道**
出版文化協會推薦圖書　三三六頁　價二・〇〇

*石川榮耀著　**都市の生態**
都市の科學的研究報告　四〇八頁　價二・五〇

*宮澤俊義著　**東と西**
法學究の文化批評論集　三二〇頁　價二・〇〇

*桑木嚴翼著　**書物と世間**
書籍評論と世相の批判　三五二頁　價二・五〇

*織田萬著　**法と人**
語るは法學界の書宿　三三六頁　價二・五〇

堀口大八著　**輸送戰爭**
陸海交通の理念と實際　發行豫定　十八年五月

挾間文一著　**發光動物**
發光動物の生理生活史　發行豫定　十八年六月

*印既刊　B6判清裝　各口繪入　〒各〇・一五

519.8
I.76
5

終